氏名　湊　武

学位の種類　医学博士
学位授与番号　乙第767号
学位授与の日付　昭和51年6月30日
学位授与の要件　博士の学位論文提出者
（学位規則第5条第2項該当）

学位論文題目　**本態性高血圧症による左心室肥大心電図と運動負荷心電図**

論文審査委員　教授 砂田輝武　教授 大藤　眞　教授 西田　勇

学位論文内容の要旨

本態性高血圧症の心電図変化，とくにそのＳＴＴの変化の本態を明らかにする目的で，ほゞ正常な血圧にコントロールされ，安静時心電図でSV_1+RV_5 or RV_6が35㎜以上を示す本態性高血圧症76例（男52例，女24例，平均年令51.6±7.8才）を対象に，Master の2重2階段試験を行なった。これらの対象を安静時のＳＴＴの変化の程度によって，ＳＴＴ降下の著明な（Strain Pattern）Ａ群（10例），虚血性ＳＴＴ降下の軽度なＢ群（22例），Junction 型のＳＴＴ降下を示すＣ群（17例），ＳＴＴの変化を伴わないＤ群（27例）の4群に分類し，あわせて20例の健常者（男6例，女14例，平均年令36.7±14.1才）とを比較検討した。これら対象の運動負荷量をKatz's Indexで検討した結果，各群とも運動量として，ほゞ同一量を負荷したことを確認した。成績は以下の如くであった。

① 安静時心電図でＳＴＴ変化が著明なStrain Pattern を示すＡ群は，QRS 棘波の電位が著しく高く，左軸偏位，ＱＴ比の延長がみられた。

② このＡ群の運動負荷後の心電図では，いわゆる陽性反応を示すものは殆んどなく，この結果からQRS 棘波の電位が著しく高い場合のＳＴＴ変化は，主として脱分極過程の変化に伴う再分極過程の変化，つまり二次的変化と考えられた。

③ この安静時心電図変化はベクトル心電図（Frank法）においても，QRS 最大ベクトルの左後方への偏位並びに増大，Ｔ環の形態の変化を伴わない方向の変化と考えられた。

④ QRS 棘波の増高がそれ程著明でない場合（Ｂ，Ｄ群）の運動負荷後の陽性例は一応心筋障害に伴う一次的な変化と考えられた。

論文審査の結果の要旨

本研究は，本態性高血圧症による左心室肥大心電図と運動負荷心電図について研究したものであるが，未だ不明な点の多い本態性高血圧症の心電図変化，とくにそのＳＴＴの変化の本態について重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって，本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。